大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ピエール・ボエスチュオー研究（３）『世界劇場』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006034

ピエール・ボエスチュオー研究
（3）『世界劇場』

鍛　治　義　弘

『世界劇場』*Le Théâtre du Monde*はピエール・ボエスチュオーの第二作であり、1558年にパリのヴァンサン・セルトナ書店から刊行された。ボエスチュオーの他の作品同様、あるいは他の作品以上に、好評を博したようで、1619年までに、『人間の優越と尊厳に関する小論』との合版もあわせて、80版近く出版されている[1)]。さらに1566年以降は、ラテン語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語、英語等に翻訳されており[2)]、西ヨーロッパ全体で広く流行した作品となった。

この作品は「現世の蔑視」Contemptus Mundiという、人間の悲惨な状況を語り、神の慈悲に頼るよう勧める伝統的なジャンルに属するものである。このジャンルはトポスとして、「現在」を堕落した危機的状況として描く。ボエスチュオー自身も行うそうした言及[3)] は、確かにこのジャンルに属する一連の作品に見られるものではある。しかしこの作品の書かれた時代背景を少し見ておくのもまったく無駄というわけではないだろう。

一六世紀前半のフランスは、一五世紀末に始まったイタリア戦争とそれに連関したハプスブルク家との覇権争いに明け暮れていた。しかしこの対外的抗争は1559年のカトー・カンブレジ条約でイタリア戦争が終結し、一応の平安を見た。しかし国内的にはまた異なる紛争の火種を抱えていた。ドイツに発した宗教改革の波はフランスにも及び、1541年ジュネーヴに定着したカルヴァンは、1542年に『キリスト教綱要』フランス語版を出版し、多くの牧師をフランス国内に送り、改革派の勢力を拡大しつつあった。実際フィリップ・アモンやアルレット・ジュアナは1550年代中頃からの改革派の勢力伸張を指摘している[4)]。こうして『世界劇場』出版の翌年1559年パリでフランスプロテスタント教会の第一回総会が開催され、これに対して王権側は

---

1) ミシェル・シモナンによる出版一覧表を参照のこと。Pierre Boaistuau, *Le Théâtre du Monde*, édition critique par Michel Simonin, Droz, 1981, pp.27-29.

2) Michel Simonin, Introduction au *Théâtre du Monde*, édition critique par Michel Simonin, Droz, 1981, p.9.

3) Pierre Boaistuau, *Le Théâtre du Monde*, édition critique par Michel Simonin, Droz, 1981, p.49. << un tel siecle que le nostre, qui est si corrompu, depravé et confict en toutes especes de vices et abominations, qu'il semble proprement que soit le retraict, et l'esgout, ou toutes les immundicitez des autres siecles et aages se soient venues espurer et vuyder. >>「私たちの時代は腐敗し、堕落し、あらゆる種類の悪徳と嫌悪すべきことに浸かっているので、他の時代年代の便所、下水、あるいはすべての汚物も浄化され、取り除かれたとさえ思われる。」本論での『世界劇場』からの引用はこのシモナンによる校訂版による。

4) Philippe Hamon, *Histoire de France, Les Renaissances*, Belin, ©2009, p.410. << Pourtant une inflexion se dessine au milieu des années 1550; désormais l'augmentation du nombre de fidèles permet de << dresser >> localement de véritables églises avec pasteur stable et célébration des sacrements de la cène et du baptême. >> ; Arlette Jouana et alt., *Histoire et dictionnaire des Guerres de religion*, Robert Laffon, ©1998, p.41. << À partir de 1555, c'est une véritable éclosion d'églises à la genevoise, une multiplication spectaculaire. >>

同年６月２日エクワン王令を出し、異端追及を行う。1562年３月１日のヴァシーでの新教徒虐殺に始まる宗教戦争の開始までにはまだ少し間があるが、『世界劇場』で言及される不和には、こうした新旧両派の対立の中での緊張が高まりつつあった時代背景を考慮に入れる必要があろう。

ボエスチュオーの他の作品同様、『世界劇場』もおそらく日本でこれまで一度も紹介されたことはないであろうから、まずは概要を記しておこう。

スコットランド出身の高位聖職者ジャック・ビートンへの献辞で始まり、ボエスチュオー自身による二編のラテン語のエピグラムに続いて、読者へのこの書の序文で、この作品の制作意図などが語られる。多くの聖俗の「さまざまな権威の寄せ集めあるいは集成」<<Rapsodie ou Recueil de diverses auctoritez>>（p.47）たるこの作品は、「サチールと悪徳の解剖である」<<Satyres et anatomies de vices>>（p.47）と言うのである。

さらにバイフのソネ、ベルフォレのソネ２編、アルシノエ伯爵（ニコラ・ドニゾ）のエレジー、読者へ注意、主要な題材の一覧が続き、本論が始まる。

本論は三部で構成されており、第一巻は、ヘラクリトス、デモクリトス、ティモン、マルクス・アウレリウス、クリソストモス、聖ベルナール、プリニウスの悲惨に対する意見で幕を開ける。そしてプルタルコスの言葉を契機として、「神の手の下でへりくだることを学ぶため」[5] に動物との比較がなされ、これが第一巻の主要部をなす。

自然は動物に、生まれつき身を守る羽や鱗や樹皮を与えたのに対して人間を裸で創造したとの比較で始め、ロタリオの『人間の悲惨な境遇について』に倣いながら、自然は人間に飽きることのない欲を与えたが、動物は飽食することも酩酊することもないと続ける。さらにはジェッリの『ラ・キルケー』によりながら、自然は動物に病気の治療法を教えたとして、犬や猫が食べ過ぎたとき、露で湿った葉を食べて腹を下すなどの例をあげて、プルタルコスの言うように、薬草などの薬、食餌、外科の三種の治療法を知っていると感嘆する。

ここから動物の素晴らしい技に言及され、ローマ時代のクラウディオ・アイリアノス（175頃-235頃）がギリシア語で著した『動物の特性について』などをもとに、蜘蛛の巣、夜鳴鶯の声などが列挙される。さらに動物の優れた性質に及び、コウノトリの親子の愛、燕の秩序、カッコウの慎重さ、馬の高貴さ、犬の忠実さなどが称揚される。

こうして第一巻の終りには、動物と比べて、人間の高慢、思い上がりを非難する、次のような文が書かれることになる。

「それゆえ、結論として、地上の惨めな虫でしかない人間、（永世の希望を除いて）かろうじて這うしかできない人間、すべての被造物のなかで最も悲惨な人間だけが自然の秩序全体に、すべての被造物が留まる自分の職務に、あえて挑むのは大きな嫌悪、忌まわしいことであ

---

[5] << à fin qu’il apreigne à s’humilier soubs la main de son Dieu >> (p.73)

り、一瞬で人間を無にすることのできる神に対して立ち上がるのは、非常に大胆で恥知らずである。しかしだれが、他のすべての被造物、天、地、海、星、惑星、すべての元素、獣、天使、悪魔が従う主に一人抵抗する人間の高慢、思い上がりに驚かないだろうか。」[6)]

第二巻の始まりに、ボオエスチュオーは第一巻をまとめ、第二巻の展開を示す、次の文を置く。

「私たちは、この第一巻で、人間と動物を比べ、人間がその尊厳のために讃美されあるいは称揚されるべきであるどころではなく、多くのことで動物に劣りさえすることを示した。それゆえこうして軽薄な基礎を投げ出し、人間の悲惨のいくつかの粗い輪郭を描いたので、いまや、私たちの論を続け、より先に入り込み、人間の生のこの哀れな悲劇を続けることが残っており、生殖創造から始める。次に、すべての年代、人生の時代を論じ、最後に墓場に導くが、それはすべてのものの最終的目的、終局である。」[7)]

こうして、この第二巻の始まりで、シモナンが指摘するように[8)]、ロタリオのプランに戻る。つまり人間の懐胎から死までの悲惨が語られことになるが、第二巻でボエスチュオーが述べるのは、結婚までのことである。

ロタリオは懐胎から人間の悲惨を説き起こすが、ボエスチュオーも、子宮が、当時の医学が考えていたように、二つの精液を受け入れたときから、第二巻の本論を始める。ただロタリオとは異なり、ボエスチュオーはこの懐胎の模様を、アラス生まれの医師ニコラ・ド・オーパの医学書『人間本性の考察についての第一書』[9)]に基づいて描写する。

「その結果、子宮が二つの精液を受け入れ保持し、自然の熱によって熱くなったとき、卵の殻の下にあるのにほぼ似た、小さな皮膜が具体化するが、文字通りに未熟な卵にしか似ていない。次に数日後、精気と血液が混じりあい、沸騰し始め、かきたてられた水から立ち上が

---

6) *Le Théâtre du Monde*, p.99.<< C'est doncques pour conclusion grand horreur et abomination, que l'homme qui n'est que miserable ver de terre, qui à peine se peut trainer (hormis l'esperance de la vie eternelle) et est le plus miserable de toutes creatures, luy seul ose repugner à tout ordre de nature, et à son office, auquel toutes creatures demeurent, et mesme est si hardi et effornté de s'eslever contre son Dieu, qui est un moment le peut abismer. Mais qui ne s'esmerveillera de la fierté et outrecuidance de l'homme qui seul ose resister à son seigneur, auquel toutes autres creatures, ciel, terre, mer, estoilles, planetes, tous elements, bestes, anges, diables obeissent ? >>

7) *Le Théâtre du Monde*, p.100.<< Nous avons en ce premier livre conferé l'homme avecques les animaux, et monstré que tant s'en fault qu'il se doive ou magnifier pour sa dignité, que mesme il leur est inférieur en beaucoup de choses. Aiant doncques jetté ce leger fondement, et figuré quelques linéamens grossiers de miseres humaines il nous reste maintenant, poursuivant nostre discours, penetrer plus avant, et continuer ceste piteuse tragedie de la vie de l'homme, commençant par sa generation et production : puis discourir par tous les aages, et particules de sa vie, tant que nous l'aions conduict au sepulchre, qui est le dernier but, et periode de toutes choses.>>

8) Michel Simonin, Boaistuau, *Le Théâtre du Monde*, Droz, 1981, p.255, note 124. << Le *Théâtre* retrouve ici le plan du *De miseria humanae conditionis* de Lothaire, le futur pape Innocent III (I, i, ii, et iv) et par là l'un des *lieux* obligés du genre de la *miseria hominis* :>>

9) Nicolas de Haupas, *Premier livre de la contemplation de nature humaine*, Paris, Vascosan, 1555.

るブイヨンからのように、三つの皮袋あるいは瓶が立ち上がり、この瓶はこの見事な動物の三つの最も高貴な部分、肝臓、心臓、そして脳の形作られる場所である。それは作品の最も優れた部分で、すべての機能の座、感情、運動の本当の源泉、知性、記憶の素晴らしい宮殿、理性の本当の箱である。」[10)]

このように当時の医学理論に基づいて、胎児の形成を述べ、そこに、テオドレトスへのロラン・ピエートルの注釈を援用して、最初の六日間はミルクのよう、次の九日間は血、その次の十二日間は肉で、その後の十八日間に魂が注ぎ込まれる[11)]、とボエスチュオーは付け加える。

こうして孕まれた人間は、ロタリオが語るのと同様に、母の胎内に居るときから悲惨であり、出産にあっては畸形が生まれることもあると、ポリドロ・ヴィルジリオなどをもとに、畸形を六例を挙げる。このように懐胎が「人生の悲劇の第一幕」<< le premier acte de la tragedie de la vie humaine >>（p.105）であり、その後に述べられる乳児、幼児、思春期も当然悲惨を免れるはずもない。

成人に達した後は、各自の身分職業estatsによって、個々別に論じられ、船乗り、農夫、商人、兵士、宮廷人、聖職者、裁判官の悲惨が詳述される。ことに兵士についての部分では、エラスムスの格言『戦争は体験しない者にこそ快し』をもとに、戦争のおぞましさを余すところなく繰り広げる。

身分職業に応じた悲惨に続いては結婚が取り上げられ、まずエラスムスの『結婚礼讃』などに従い、妻、子を持つことの楽しみが述べられるものの、その後ラ･ペリエールの『経世の鑑』にあるように、薔薇に多くの刺を見出しうるとして、やはり結婚も悲惨であるとして、第二巻

---

10) *Le Théâtre du Monde*, pp.100-101. << en sorte, que quand la matrice a prins et retenu les deux semences , et eschauffées par la chaleur naturelle, il se concrée une petite peliculle, quasi semblable à celle qui est dessous de la coque d'un œuf, en sorte que cela ne ressemble proprement qu'à un œuf abortif. Puis quelques jours après, les esprits, et le sang meslez ensemble commencent à bouillir qu'il s'eslieve trois petites vessies ou ampoulles, comme aux bouillons qui s'eslievent en l'eau agitée, lesquelles ampoulles sont les lieux où sont formées les trois plus nobles parties de ce superbe animal, le foïe, le cœur, et le cerveau ; lequel est la plus excellente partie de l'œuvre, qui est le siege de toutes les functions , la vraye fontaine du sentiment, mouvement du magnifique palais d'intelligence, et memoire, la vraye arche de raison. >>　前註の書のマザリーヌ図書館所蔵版が今ではGallica上で公開されており、この部分は、シモナンの指摘とは異なり、次の三つの部分を繋ぎ合わせたものであることがわかる。（第２章、f°.6v°-7r°）<< Quand doncques la matrice a prins et retenu les deux semences meslees ensemble, elle, par sa chaleur naturelle qui est vehemente, les eschauffe soudain si fort, que à l'entour desdites semences se concree une pellicule, quasi semblable à celle qui est au dessoubz de la coque d'un œuf : en sorte que le tout est faict tel qu'un œuf abortif. >>（第４章、f°.8r°-v°）<< Les espritz donques, et le sang meslez avec la semence, qui desia au paravant bouilloit, commencent à bouillir, et tousiours bouillent de plus en plus, tellement que s'eslevent trois petites ampoulles, semblables à trois petites vessies, ou aux bouillons qui s'eslevent en l'eau agitee par la pluye. Icelles ampoulles sont les lieux, ou seront formez le foye, le cueur, et le cerveau : les trois principaulx membres de tout le corps. >>（第９章、f°.12r°）<< il reste maintenant que nous achevons de monstrer la production de la partie la plus excellente de tout l'œuvre : qui est le tres noble siege de toutes les functions, la vraye fontaine du sentiment et mouvement, le magnifique palais d'intelligence et memoire, la vraye arche de raison : c'est le cerveau, lequel s'engendre ainsi que s'ensuit. >>

11) *Le Théâtre du Monde*, p.101-102. << Et comme les six premiers jours il est comme laict, les neufs ensuyvant sang, les douze autres chair, et les dixhuict qui suivent l'ame luy est infuse. >>

を終わる。

第三巻冒頭ではまた次のように述べて、この巻での展開が予告される。

「それゆえ諸職業に自分たちの商いを行わせ、この世の店で罠と網を張らせておき、人間の悲惨の跡を再開し、身を低くさせ、神を知るよう導くために、自然が土のこの貧しい船を苦しめようと望んだ他の災厄を詳細に論じよう。」[12)]

こうして、キリスト教世界の意見の対立[13)]を述べた後、第三巻ではさまざまな災厄が採り上げられる。まずは神の怒りの三つの矢、戦争、悪疫、飢饉から始められるが、戦争は、第二巻の兵士のおりに、悲惨が詳しく語られたので、ここでは短く触れられるに過ぎない。それに対して悪疫と飢饉は、ギヨーム・パラダンの『当代史』などから例を引いて詳述され、飢饉を述べる際には、古代の例を挙げて、食人にも言い及ぶ。

次に人狼などの病や毒の話が、かなりの分量をもって述べられるが、これはボエスチュオーのこうした分野への関心を示すものであろう。

次に四大による災厄として、水害、洪水、火災、火山の噴火、嵐、地震、動物の害などが、ポッジョなどを典拠として、列挙される。

この後に精神の病が語られるが、ボエスチュオーが精神の病と言うのは、物欲、妬み、高慢、恋愛のことであり、これはロタリオがその書の第二部で扱う、貪欲、肉欲、高慢などに対応するものであろう。こうしてまたロタリオのプランにもどり、最後に老年、死、最期の審判に触れて、第三巻を締めくくる。

以上ボエスチュオーの『世界劇場』の内容をごくかいつまんで紹介した。次のこの作品の特徴を探るために、「現世蔑視」の伝統の中で、特に関連の強いものを二つ見ておこう。第一は、ロタリオ・デイ・セニ、後の教皇インノケンティウス三世（1160/61-1216：教皇在位1198-

---

12) *Le Théâtre du Monde*, p.170.<< Laissons donques les estats faire leur traficque, tendre leurs rets et filets en la boutique de ce monde et reprenons noz erres des miseres humaines, et deduisons par le menu les autres fleaux desquels nature a voulu tourmenter ce pauvre vaisseau de terre, pour le faire abaisser et amener à la cognoissance de son Dieu. >>

13) *Le Théâtre du Monde*, pp.170-171. << Mais maintenant (ingrats que nous sommes !) le seigneur a si bien retiré la lumiere et splendeur de son evangile de nous pour noz pechez, qu'elle ne luist qu'en petit coing et angle de l'Europe. Encores ce qui nous doit donner plus grand terreur, sont les diversitez des opinions qui sont entre nous, et les erreurs desquelles nous sommes envelopez : car ce que l'un dict estre blanc, l'autre dict estre noir : ce que l'un appelle jour, l'autre l'appelle nuict.Ce qui est lumiere à l'un, est tenebre à l'autre. Ce que l'un trouve doux, l'autre le juge amer. Ce qui est Jesus Christ, verité, et paradis à l'un, est Antichrist, mensonge et enfer à l'autre. >>「しかし今では（私たちはなんと恩知らずか）主は私たちの罪のために、私たちから福音の光と輝きを取り上げられたので、ヨーロッパの小さな片隅しか照らしていない。さらに私たちにより大きな恐怖をあたえるはずのものは、私たちの間にある意見の多様さと、私たちを覆う誤りである。というのもある者が白と言うものを、別の者は黒と言うから。ある者が日と言うものを、もう一人は夜と言う。ある者に光であることは、もう一人には暗闇である。ある者が甘いと思うものを、もう一人は苦いと判断する。ある者にイエス・キリスト、真実、楽園であることは、もう一人には反キリスト、虚偽、地獄である。」

1216）による『人間の悲惨な境遇について』*De miseria conditionis humane* であり、1194年12月25日から1195年４月13日の間に完成されたという[14]。この「人間の傲慢をくじき、謙虚へと導くために人間の境遇の卑しさを記述する」[15]書には、幸いに日本語訳が存在し、訳者である瀬田幸男はこの書の構成を次のように要約している。

「第一部は人間の懐妊の悲惨さについて、また、人間の嫌悪すべき肉体的な様相、特に老醜についてや、この世で人間が堪え忍ばねばならならぬ様々な悲哀を扱い、第二部では人間が現世で追い求める三つの目標、即ち富と快楽と名誉についての豊富な例話を引用し、それらが如何に空虚なものであるかを鮮明に描写し、第三部は肉体の腐敗、地獄の様々な拷問と最後の審判の日のキリストの再臨を論じている。」[16]

この短い紹介だけで、ボエスチュオーの書が、いかに多くをロタリオに負っているかが理解できる。目的とするところは同じであり、懐胎から死、最後の審判に至る間の悲惨を述べるという構成の点でも、ボエスチュオーは第二巻以降をロタリオの書から、セアールの指摘するように[17]、全体的プランを借りていると言えよう。

もう一つの重要な参照作品は、ポッジョ・ブラッチョリーニ（1380-1459）の同じく『人間の悲惨な境遇について』*De miseria humanae condotinonis*（1455）という作品である。『浮流道化譚』や『貪欲論』（1428-29）[18]などで知られるこのイタリアのユマニストに、ボエスチュオーは『王侯の不幸について』の名を挙げて本文で言及しており[19]、ポッジョの『人間の悲惨な境遇について』からの例を引いてもいるので、この書を見ていたことは確かである。この書は日本語訳はおろか未だに近代版もなく、イタリアで出版されたポッジョの全集[20]でも一六世紀の版を再掲している状況であるから、私たちが解説するのは非常に困難であるが、概要だけを紹介しよう。

ロタリオの作品とは異なり二部からなるこの作品は、対話形式である。対話者は、フィレンツェの実力者コジモ・デ・メディチCosimo de’ Medici（1389-1464）、『市民生活論』（1430年代前

---

[14] Robert Bultot, << Mépris du monde, misère et dignité de l’homme, dans la pensée d’Innocent III >>, in *Cahiers de civilisation médiévale*, 1961, p.442.

[15] *Ibid*., p.445. << décrire la vileté de la condition humaine pour abattre l’orgueil de l’homme et l’amener à l’humilité. >>

[16] ロタリオ・デイ・セニ、『人間の悲惨な境遇について』、瀬谷幸男訳、南雲堂フェニックス、1999、における瀬谷の「訳者あとがき」、153頁。

[17] Jean Céard, <<Compte rendu du *Théâtre du Monde* (1558)>>, dans *B.H.R*., Tome XLIV (1982), p.201. <<Ainsi Boaistuau se garde de nommer la cardinal Lothaire, futur Innocent III, dont le *De miseria humanae conditionis* est pourtant mis au pillage, au point de lui fournir le plan générale du *Théâtre*. >>

[18] 池上俊一監修『原典イタリア・ルネサンス人文主義』、名古屋大学出版会、2010、に、石坂尚武による日本語訳と解題がある（215-269頁）。

[19] *Le Théâtre du Monde*, p.144. << Pogge Florentin a faict un traité particulier de l’infélicité des princes>>

[20] Poggio Bracciolini, *De miseria humanae conditionis*, in *Opera omnia*, Tomus primus, Bottega d’Erasmo, Torino, 1964. バーゼルで1538年に刊行された版の復刻版で、何らの註もない。次の書に、Martin Davies による冒頭数頁の英語訳と註と短い解説がある。*Cambridge Transalations of Renaissance Philosophical textes, Volume I : Moral Phiolsophy*, edited by Jill Krayne, Cambridge University Press, ©1997, pp.17-28.

半以降)[21]『生命都市』(1460年前後)などの作者マッテオ・パルミエーリMatteo Palmieri(1406-75)とポッジョ本人の三人であり、1453年のコンスタンチノープル陥落を受けて論議がなされる。

コジモの、「優れた哲学者や指揮官を悲惨であると判断するのは愚かである」[22]、との立場に対して、あとの二人は悲観的に答える。即ちポッジョは「それゆえ、すべてが悪であるから、また悲惨であると認めるのが当然である」[23]と答え、さらにパルミエーリは「人間にとって最善は、第一に生まれないこと、そのすぐ次は早く死ぬことだと思われる」[24]とまで言う。こうして第一巻では三人が二つの立場に分かれて論争をかわす。それに対して第二巻については「先の巻では、人間の悲惨な境遇について、私たちの本性の様態のために討議されましたが、より重要な例と過去の事柄の記憶で私たちの見解がより明白になるようにこの第二巻を添えます」[25]と述べられ、専らポッジョが語り、古代世界からゲルマン人の移動、近い過去の情勢までの例を挙げて、悲惨を説く。いわば前半は理論、後半は例という構成である。

さらにポッジョの悲惨論を特徴づけると思われるのは、悲惨と運との関係で、ポッジョの口から「私たちの生は知恵ではなく、運に支配される。これが真実であるかぎり、私たちは必然的に悲惨である」[26]と語られていた。

このように見てくれば、ボエスチュオーの『世界劇場』がポッジョに負うものは、ロタリオの場合とは大きく異なることは明白である。同じく人間の悲惨を扱うとしても、ボエスチュオーは、論の構成や根本的方向では、ポッジョと相違する。ボエスチュオーが、ポッジョから得たものは、まずは、『王侯の不幸について』における王侯の悲惨や、『人間の悲惨な境遇について』で挙げられた飢餓、疫病飢饉などの豊富な例である。またポッジョは四大による惨禍に第二巻で言及し[27]、その後に洪水、火、空気、土の害を展開しており、こうした悲惨のテーマもポッ

---

[21] 池上俊一監修『原典イタリア・ルネサンス人文主義』、名古屋大学出版会、2010、に、根占献一、高津美和による部分訳と根占献一による解題がある(504-563頁)。

[22] Poggio Bracciolini, *De miseria humanae conditionis*, in *Opera omnia*, Tomus primus, Bottega d'Erasmo, Torino, 1964, p.95.<< stultum videtur viros Graeciae sapientissimos (...) , caeterosque egregios philosophos, (...) reliquosque summos Graeciae Imperatores, (...) existimare miseros fuisse. >>「この上なく賢明なギリシアの人々(. . .)、その他の卓越した哲学者(. . .)、そのほかの最高のギリシアの最高指揮官(. . .)が悲惨であったと判断するのは愚かであると思われる」

[23] *Ibid*., pp.92-93.<< Ergo concedatur oportet, quoniam mali sint omnes, et miseros quoque esse. >>

[24] *Ibid*., p.108.<<Optimum videatur esse homini primum non nasci, proximum cito mori>>.Cf.キケロ『トゥスクルム荘対談集』1、114 <<non nasci homini optimum est, proximum autem quam primum mori>>「人間にとっては生まれないことが最善であり、生まれたとしてもできるかぎり早く死ぬことが次善である」シレーノスの言葉(キケロ、『キケロ選集』12、木村健治、岩村智訳、岩波書店、2002、95頁)

[25] *Ibid*., p.112 << Superiori libro in quo de miseria conditionis humanae pro modo ingenii a nobis est disputatum, (...), et hunc secundum adjiciemus, ut et exemplis gravioribus, et rerum praeteriarum memoria lucidior fiat nostra sententia.>>

[26] *Ibid*., p.95. << Vitam nostram fortuna regi, non a sapientia. Quae si vera sunt, miseros nos esse necesse est>>

[27] *Ibid*., p.108. << Tum, ego possum testis inquam esse multarum calamitatum, quas ipse partim conspexi, partim audiui, tum igne, tum incremento imbricum illatas, ut etiam aqua et reliqua elementa sint nobis extimescenda. >>「そこで私は言う。私は多くの惨禍の証人でありうる。それらを一部は認め、一部は聞いたが、あるいは火において、あるいは水の増大において引き起こされた。火と他の元素が私たちに恐れるべきようにである。」

ジョに由来すると考えられよう。

なお付言すれば、ポッジョが長く例を引いて人間の運命の有為転変を述べ、人間の悲惨を説いたにも拘わらず、コジモはこの論の終りでいまだ「強く強固な人によって打ち勝たれないほど、運命の力は強力ではない」[28]と主張して、ポッジョやパルミエーリの立場に完全に同意するわけではない。

以上の比較により、ボエスチュオーの論の構成に関して、先行する二つの論との関係は、次のように言えるだろう。ボエスチュオーは自身の書を三巻で構成した。第一巻は、動物と比べた人間の悲惨を扱い、第二巻と第三巻では、ロタリオの論のプランに従い、懐胎から死、そして最期の審判までの、人生での悲惨を述べる。しかし第二巻で人が成人した後は、ロタリオのプランから離れ、各人が担う身分職業ごとの悲惨を示す。第三巻も人類にもたらされる災厄で始まるが、精神の病を扱う箇所から主要な悪徳を扱うロタリオのプランに戻り、同じように老年、死、最期の審判で終わる。ポッジョの作品はこうした構成に与ることはなく、悲惨の主題や例を提供するだけである。

ボエスチュオーのこうした構成は、第一巻で邪悪な自然による本性的弱さ、人間の本来的な悲惨を提示し、第二巻では、人生という、すべての人に共通する悲惨を扱い、第三巻に至って、人類にとっての悲惨、災厄、災害に言い及ぶという、いわば拡大的な展開を示しているとも言えよう。

ところで、第三巻の災厄災害を人間の悲惨として語る際、ボエスチュオーは何度か、これらが神の懲罰であると言う。こうした言及だけでは、恰も神がこうした悪の作り手であるかのようにとられる恐れがあろう。勿論キリスト者であるボエスチュオーにとって神が悪の作り手であるはずもなく、この間の事情を次のように説明している。

「というも、すべてこれらの悪と悲惨のこの海は、神の憎悪から来るのではなく、人間の悪意、堕落から来るのであり、人間がこれらのすべての苦しみと災厄の本来の作り手である。

というのも神に等しくなろうとして、人間は自分の高貴さで退化し、自らに刻まれた神の似姿を消し、その姿を悪魔の姿に変えようとし始めたから。それゆえ預言者が言ったことが出来した。人間は栄誉にあって、それを理解しなかった。しかし野獣と同じように作られた。これが人間の尊大、不遜、厚かましさが、全人類のすべての傷と呪いの原因であるのだ。というのも、この最初の人の偉大になるとの野望欲望がなければ、私たちは天使のごとく留まったであろうし、復活で名誉と栄光で栄冠を与えられるであろうように留まったであろうから。」[29]

---

[28] *Ibid*., p.131 << Non est tam valida fortunae uis, ut a forti et constanti viro non superetur. >>

[29] *Le Théâtre du Monde*, p.203.<<Car tous ces maulx, et ceste mer de miseres, desquelles l'homme est chargé, ne vient pas de la haine de Dieu, mais de la malice, et corruption de l'homme, lequel est le propre autheur de toutes ses afflictions, et calamitez.

つまりこういうことである。神に似ようとする人間は思い上がり、そのあまり自分がどのようなものか理解できないほどになった[30]。それゆえ、神は人間のこの傲慢を矯正しようと、災厄などによって懲罰をくだし、そのため人間は悲惨に陥っている、という論理である。

『世界劇場』は伝統的な「現世の蔑視」に属し、先行するロタリオとポッジョの論に構成、主題の点で多くを負っている。またその論理も、古代教父以来の論理を越えるものではないように思われる。

それではボエスチュオーの特徴はどこにあるのか。以下に二点検討してみよう。

第一はタイトルに示されている「この世の劇場」である。世界を劇場と見る発想は、一六世紀末から一七世紀初めにかけてのルネサンス、バロック演劇になじみのもので、シェイクスピア、カルデロン、コルネイユなどに顕著に見られる。しかしこの発想は、クルツィウス[31]、ジャン・ジャコ[32]の指摘するように、古代のプラトン、パウロ、アウグスティヌス、中世のソールズベリーのヨハネス、ルネサンスのフィチーノ、ルター、ロンサールを経て、17世紀のシェイクスピア、カルデロンに至る、長い伝統を持つものである。ボエスチュオーは「現世の蔑視」と「世界劇場」という二つのトポスを重ね合わせているのである。

ボエスチュオーのこうした意図はすでに献辞で明らかにされていた。

「それが理由で、猊下、私はこの劇場を建てました。そこで人間は、自分の人生のすべての部分を解剖検討して、自分の卑しさを厭うように動かされるために、自分の外へ引き出されることなく、自分の弱さと悲惨を眺め目を留めることができます。」[33]

こうして、第二巻以降で、人生は劇として、大抵は悲劇として、まれに笑劇として、表現される。

Car se voulant egaler à son Dieu, il a commencé à forligner de sa noblesse, et affecter l'image de Dieu imprimée en luy, et la changer en celle du diable. Parquoy luy est advenu ce que le prophete dit : l'homme estant en honneur, ne l'a pas entendu, et pouratnt il a esté faict semblable aux jumens. Voyla comme sa fierté, arrogance et audace, est cause de toutes les playes et maledictions de tout le genre humain. Car sans l'ambition et desir d'estre grande de ce premier homme, nous feussions demeurez comme les anges , et tels que nous serons en la resurrection, couronnez d'honneur et de gloire. >>

[30] 先の引用文の直前には次のような文もあった。*Ibid*., p.202. <<Et toutesfois quelque male adventure qui luy advienne, quelque charge ou fardeau que nature luy puisse imposer, si ne se peult il humilier sous la main puissante de Dieu, pour porter son joug, ne se recognoistre tel qu'il est. >>「しかしながらどんな不運が身に起ろうと、どんな荷あるいは重荷を自然が負わせることができようと、このように、くびきを身につけるために、神の強い力の下で謙虚になることもできず、自分がどのようであるかを認識することもできない。」

[31] クルツィウス、『ヨーロッパ文学とラテン中世』、南大路、岸本、中村訳、みすず書房、1971、200-208頁.

[32] Jean Jacquot, << < Le *Théâtre* du monde> de Shakespeare à Calderon>>, in *Revue de littérature comparée*, 1957, pp.341-372.

[33] *Le Théâtre du Monde*, p.42, << A raison de quoy, Monseigneur, je luy ay dressé ce Theatre, auquel il peult contempler et adviser, sans estre tiré hors de soy, son infirmité et misere, affin que faisant anatomie et reveuë de toutes les parties de sa vie, il soit esmeu à detester sa vilité. >>

懐胎は「人生の悲劇の第一幕」<<le premier acte de la tragedie de la vie humaine>>（p.105）である。ボエスチュオーの場合も、人生を七つの段階に分けて提示するトポスにほぼ従っているように思われる[34]。ただボエスチュオーでは死と共に劇は終わらず、最期の審判が「人間の悲劇全体の最も恐るべき危険な幕」<< l'acte le plus redouté et perilleux de toute la tragedie humaine>>（p.226）であるとされる。また成年期の部分が大幅に拡大されて、身分職業の代表的なものすべてが挙げられている感があり、この点でロタリオの論とは異なることなることを先に指摘した。これは、懐胎、誕生、幼年期、少年期、成年期、老年期では人はほぼ共通する役を演じるが、成年期では身分職業により演じる役割がかなり異なるとの認識にたって、各自より個別の役を演じると考えて、なされたのであろう。

こうして世界を劇場に、人生を劇に譬えるが、先の献辞に表現されているように、この劇を見るのは、人生を演じるその人である。神が観客や審判者として想定されているわけではない。そして、この『世界劇場』で人間の悲劇を見るのは、観客がそこに自らの悲惨な姿を認め、人間がへりくだるためであるのは、言を待たない。

さらにボエスチュオーは幾つかの場合に語る例を演劇的にしているように思われる。これを食人の例を語る箇所で見てみよう。飢饉の齎す悲惨な例としてボエスチュオーはポッジョ、プルタルコスなどによりながら、古代ローマ、古代イエルサレム、ヌマンシアなどでの食人の例を六つ挙げる。そしてその最後にフラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ戦記』からの逸話を語る。イエルサレムがローマ人に攻囲された折に、ある母親が、財産を略奪された上に、飢えに駆られ、精神的にも追い詰められ、自分の乳飲み子を殺し、焼いて、半分はすぐに食し、残りを隠しておいたところ、ローマ人がそのにおいを嗅ぎつけ、脅し取ろうとやって来たが、子どもの肉と判り逃げ去った、というものである。ボエスチュオーはまず女が子どもを殺したことを「女はこの哀れな悲劇を演じた」<<elle eut joué ceste piteuse tragedie>>（p.182）と表現している。その上で女と兵のやりとりで、女の言葉を直接話法で提示する。

「しかしこの女は反対に、怒り狂った眼差しと、猛々しく厳しい動作で、兵士に言った。『どうしました。これは私の子です。私の大罪です。あなた方は食べないのですか。産んだ母より、あなた方はより良心的ですか、あるいはより思いやりがあるのですか。あなた方の前に私が使った肉をあなた方は断るのですか。それでは私はさらに今試してみましょう。』」[35]

食人のこれより先の例では概要だけを伝えていた。この最後の例ではヨセフスの本文を、「で

---

[34] フランセス・イエイツ、『世界劇場』、藤田実訳、晶文社、1978、208-209頁。『お気にめすまま』のジェイクィーズの科白での言及に対して、赤ん坊、少年期、青春期、成年期－兵士、成年期－判事、老年期、赤ん坊、とされている。

[35] *Le Théâtre du Monde*, pp.182-183. << mais elle au contraire, d'un regard furibond, et d'une contenance truculent et severe, leur dist : quoy mes amys ? c'est mon fruict, c'est mon enfant, c'est mon forfaict, que n'en mangez vous ? Je m'en suis ressasiée la premiere, estes vous plus scrupuleux ou delicats, que la mere qui l'a engendré? desdaignez vous les viandes, desquelle j'ay usé devant vous? Et en feray encores maintenant l'essay.>>

きるだけ近く翻訳した」<<J'ay traduict au plus près >>（p.182）とボエスチュオーは言うが、なんと劇的な、悲劇的な結末となっていることだろうか[36]。

『世界劇場』の第二の特徴はその例示の仕方に求められるだろう。ボオエスチュオー自身が序文で言うように、ボエスチュオーの作品、そして一六世紀の多くの作品、同様、この作品も多くの他の作家の作品の引用、言及から成り立っている。ボオエスチュオーがこの書で典拠とするものは、作品構成のもととなったロタリオとポッジョの作品は言うに及ばず、聖書や古代作家から、カルダーノ、ラ・ペリエールなどの同時代の作家まで、多岐に渡る。こうした作家から引いた例の提示の仕方に『世界劇場』のもう一つの特徴がある。そうした典拠となった作品のうちで、ここで取り上げるのはギヨーム・パラダンの『当代史』*Histoire de nostre tems*である。

パラダンの『日記』に付したMathieu Mérasの序文[37]によってその略歴を記せば次のようになる。1510年頃現セーヌ＝エ＝ロワール県のキィイゾー Cuiseauxに生まれ、パリ大学に学び、1545年にボージュー Beaujeuの聖堂参事会員となり、後に聖堂参事会長に選出され、晩年は「旧教同盟」にも参加した。ラテン語、フランス語で幾つもの作品を残したが、そのうち注目すべきなのは、1552年リヨンのジャン・ド・トゥルヌから刊行した『当代史』と1573年にリヨンのアントワーヌ・グリフから出版した『リヨン史の思い出』*Mémoires de l'histoire de Lyon*であろう。1590年１月16日に死亡した。

『世界劇場』にはパラダンの『当代史』から借りた例が四箇所あるが、1528以降フランスを襲った災厄を語るにあたり、ボエスチュオー自身がパラダンからの借用であることを次のように明言する。

「しかし、自分たちの時代で経験しないと、目で見ないと、そしてほとんど指でふれないと、古代の歴史、記念碑そして例を読むのに決して心を動かされない人がいるから、私はここで、私たちの罪に苛立たれたとき、私たちの神が古代人になした以上に、私たちを免れさせないことを示したかったが、それは、この後に続く歴史によって、たっぷり表されるようにであり、

---

[36] 不思議なことにシモナンは指摘していないが、ヨセフスのこの挿話はロタリオの『人間の悲惨な境遇について』でも語られている。ほぼ同じ内容で、そこでも女の言葉は再現されており、ボエスチュオーのものとはよく似ている。瀬谷、前掲訳、50-52頁。ラテン語版は、*Innocentii III De Contemptu mundi sive De misiria humanae conditionis libri tres*, Edidit Johann. Henr. Achterfeldt, Bonnae apud Eduardum Weber, 1855, pp.57-60を参照した。また1553年にエルブレ・デ・ゼサールのフランス語が出版されており、ボエスチュオーより詳しい内容を伝えている。*Les sept livres de Flauius Iosephus de la guerre et captivite des Ivifz* traduictz de Grec et mise en Francoys par de Herberay, Seigneur des Esçars, Paris, Jean Longis, 1553, f°CCIIII v°-CCV r°.この書での 女の発言は以下の通りで、ボエスチュオーの言葉遣いとはかなり異なる。f°CCIIII v°-CCV r°<< Lors la femme : cestuy (dist elle) est veritablement mon filz et mon ouvrage, vous pouvez en manger hardiment, puis que j'en ay mangé la premiere : il feroit beau voir que vous eussiez moins de cueur, et fussiez plus delicatz qu'une femme, ou plus misericordieux qu'une mere. Que si vous avez la pitié en quelque reverence, refusez si bon vous semble me demeure. >>ボエスチュオーが本当に自分で訳したのかは決定し難いが、食人の例の最後の例として置き、女の言葉を再現して話を締めくくっていることには、かわりない。

[37] Guillaume Paradin, *Le journal de Guillaume Paradin ou la Vie en Beaujolais au temps de la Renaissance (vers 1510-1589)*, Edité par Mathieu Méras, Droz, 1986. Introduction, pp.1-30.

その歴史をギヨーム・パラダンが書いたが、この人は確かに博識で大変な努力の人で、歴史に関することで、私たちの時代の記憶すべきことの論で傑出した学識の人である。」[38)]

この例は先の食人の話に続くものであり、古代の例の、あまりに異常なものでは信用を得られないのではないかと危惧して、読者により親しい例を提示して、当代の例を挙げるというのである。

1528年以降の災厄を述べるにあたり、パラダンに基づき、ボエスチュオーはつぎのように始める。

「1528年、世界はあらゆる悪徳の手綱を緩め、罪と卑劣に満ちて状況が非常に悪かったので、猛烈な攻撃と先立つ戦争の大きな流血に、謙虚になり悔い改めなかっただけでなく、反対に悪化し、完全に堕落してしまった。

そのため神の怒りの栓はこの哀れなフランス王国で緩めはがされた。すべてが最期、最後のときに追いやられたと考えられるようにであった。というのも、地の収穫物と齎されるもの同様人体において、このような懲罰の時代の記憶で新しいものはないほど大きな災厄、貧困と悲惨が出来したからである。」[39)]

この部分を典拠となったパラダンと比べて見よう。

「この時世界はあらゆる悪徳の手綱を緩めていて、大変状況が悪く、罪と卑劣に満ちていたので、戦争の懲罰は単に世界を謙虚にし悔い改めさせなかっただけでなく、反対に世界は大変悪化し、完全に堕落してしまったように思われた。そのため神の怒りの栓はこの哀れなフランス王国で緩められはがされた。すべてが最期、最後の時に追いやれたと考えられるようにであった。というのも、地の収穫物と齎されるもの同様人体において、このような懲罰、あるいはむしろ滅亡の時代の記憶によって新しいものはないほど大きな大きな災厄、貧困と悲惨が出来し

[38)] *Le Théâtre du Monde*, p.183. << Mais pource qu'il y en a aucuns qui ne sont jamais esmeuz pour lire les histoires, monumens et exemples des anciens, s'ils ne l'experimentent en leur siecles, et s'ils ne les voyent à l'œil, et quasi touchent au doigt, j'ay bien voulu icy monstrer que nostre Dieu ne nous espargne non plus qu'il a faict les anciens, lorsqu'il est irrité par noz pechez, comme il sera amplement manifesté, par l'histoire qui s'ensuit, laquelle Guillaume Paradin a escrite, homme certainement docte et de grand labeur, et doctrine exquise, en ce qui concerne les histoires, au traicté des choses memorables de nostre temps, >>

[39)] *Le Théâtre du Monde*, pp.183-184. << l'an mil cinq cens vingt et huict le monde lascha si bien la bride à tous les vices, et estoit si mal conditionné, plein de peché et vilenie, que non seulement il ne s'estoit point humilié et amendé, pour les furieux assaults, et grande effusion de sang des guerres precedentes : mais au contraire qu'il estoit empiré, et totalement depravé.

Au moyen du quoy la bande de l'ire de Dieu estoit laschée et desbordée en ce pauvre Royaume de France de telle maniere, qu'on estimoit tout estre reduict à la fin, et dernier periode : car il advint si grande calamité, pauvreté et misere, qu'il n'est nouvelle par la memoire des temps, de telle punition, tant es corps humains, qu'es fruictz et revenuz de ta terre :>>

たからである。」[40)]

「戦争の懲罰」が「猛烈な攻撃と先立つ戦争の大きな流血」と変更されたほかは、ほとんどパラダンの文をそのまま引き写しているのが一見して理解されよう。実はこの災厄を語るに当たり、ボエスチュオーはパラダンの『当代史』の第三巻第三章「当代の奇妙な災厄」<<Estrange calamité de tems>>をほとんど原文をそのまま引いている。

パラダンは1528年からフランスを襲った飢饉とそれに起因する災厄を実に見事に説明している。異常気象のため、暖冬となり、それにより冬でも虫が発生した。その虫が麦の穂を食べたために飢饉となり、小麦の価格が上昇し、放浪民が増加する。そのとき疫病が発生し、さらに悲惨な事態に至る。飢えに苛まれた貧民は羊歯の根でパンを作るほどになる。商人はこうした状況につけこみ農民から土地を奪う。パラダンは自分の体験したことも織り交ぜながら、この災厄の展開を「科学的」といえるほど一貫して叙述する。

ボエスチュオーがこの例をほぼ原文のまま引き写したのは、近い過去において実際に起こったことを、見事に説明するパラダンの記述の圧倒的な説明力によるものと考えられる。しかしボエスチュオーは、羊歯のパンの作り方などの、自分の例示にとって余剰だと感じられ細部を削ることを忘れない。

こうしてボエスチュオーはパラダンの説得力に富む記述を、剽窃と見なされることも厭わずに引き写しながら、自分の論にうまく適合させている。そして、この災厄に関する例の最初の文が示すように、人間の悪徳が神の懲罰を招くという考え方も共通していた。

最後にパラダンから例を取りながら、興味深い違いが見られる場合を見ておこう。1533年ローマでティベレ川が氾濫し、数千人の死者が出た災害の話を、ボエスチュオーは、フランスでの飢饉の場合と同様に、パラダンから借り、ここでもほぼ原文をそのまま引き継いでいる。しかしパラダンの書物では、この洪水の話の前に次のような文があった。

「そして同じ日々にローマである女性から非常に不恰好で不完全な子どもが生まれたが、目も口もなく、人間の体なのか獣の体なのかも見分けられなかった。そしてこの怪物〔畸形〕はティベレ川の増水氾濫を意味していた」[41)]

[40)] Guillaume Paradin, *Histoire de notre tems*, Lyon, Jean de Tournes et Guillaume Gazeau, 1558, pp.233-234. << En ce tems le monde ayant laché la bride à tous vices, estoit si mal condicionné, et plein de peché et vilennie : qu'il sembloit, que la punicion des guerres ne l'eut non seulement point humilié et amendé, mais au contraire qu'il en fust beaucoup pire, et totalement depravé. Au moyen dequoy estoit la bonde de l'ire de Dieu laschee, et desbordee en ce poure Royaume de France, de maniere qu'on l'estimoit tout estre reduit à la fin et dernier periode. Car il y avint si grande calamité, povreté et misere, qu'il n'est nouvelle par les memoires des tems de telle punicion, ou plustot ruïne, tant es corps humeins, que es fruits et revenus de la terre.>>.

[41)] Guillaume Paradin, *Histoire de notre tems*, Lyon, Jean de Tournes et Guillaume Gazeau, 1558, pp.257-258. << En ces mesmes jours nasquis à Romme d'une Dame un enfant tant difforme et imparfait, que pour n'avoir yeus ni bouche ne se pouvoit discerner si c'estoit corps humein ou de beste : et sinifioit ce monstre, l'infacion et debordement du fluve de Tybre : >>

内容の概要でも見たように、ボエスチュオーも畸形に関心を示し、人間の誕生を物語る際に、悲惨の例として、『世界劇場』を書いている間にパリで誕生した双頭の誕生のような例を挙げている。しかしそこで、パラダンのこの例は挙げられず、また洪水の惨禍を語る際にも、この話に触れていない。パラダンの場合には、畸形の誕生を洪水の前兆とする思想が明瞭に見て取れるが、ボエスチュオーはこの考えを、少なくとも『世界劇場』執筆時点では、認めていないように思われる。

ポッジョがコンスタンチノープルの陥落を受けて『人間の悲惨な境遇について』を起草したように、ボエスチュオーは新旧両派の分裂対立を危惧し、それがもたらすであろう破壊を予感して『世界劇場』を書いたと思われる。構成に当たってはロタリオの論のプランの大筋を採用し、そこにポッジョの論や他の作家から悲惨の主題や例を付け加えて、人間の悲惨を見せる劇場を巧みに構築し、人間が生まれ持った悲惨、人生という悲惨、神の懲罰としての災厄を巧みに示すのに成功している。

しかしこの論はロタリオのように悲観論一辺倒ではない。この書にすぐ引き続いてボエスチュオーは人間の尊厳を歌うが、その余地をすでに潜ませている。第一巻の動物との比較は、動物の優れた点を述べて、人間の無力を際立たせようとしたものだった。たしかにこの部分の冒頭と末尾でボエスチュオーはこの意図を繰り返す。けれど動物の示す巧みには、むしろ「驚き」<< s’estonne>>（p.85）、「驚嘆する」<<se esmerveillera>>（p.84）のである。そして自然において動物ほど恵まれていない人間が自らの知恵で上回る可能性を残している。さらに人間の懐胎を述べた折に、人間には魂が吹き入れられる、とボエスチュオーはしていた。『世界劇場』ではこの魂がいかなるものであるかは何も語られない。それは『人間の優越と尊厳についての小論』で詳しく語られることになるのだった。

Étude de Pierre Boaistuau

(3) Le Théâtre du Monde

Yoshihiro KAJI

Le Théâtre du Monde est le deuxième livre de Pierre Boaistuau, publié en 1558, et a eu un grand succès avec maintes réimpressions et même des traductions en diverses langues européennes au XVIe siècle. Ce traié se situe dans la tradition de << Contempus mundi >>, qui traite les misères de l'homme pour qu'il s'humilie en vue de faire recourir à la miséricorde divine. Cette œuvre doit son plan général au *De Miseria Conditionis Humane* de Lothaire, pape Innocent III. L'auteur emprunte les thèmes et les exemples sur les situations misèrables de l'homme au dialogue de Pogge, qui a le même titre que l'ouvrage de Lothaire. Après ce remarque, nous analysons deux particularités du livre de Boaistuau : la représentation de ce monde comme théâtre et de la vie humaine comme tragédie, et la manière de mettre en œuvre des exemples dans le cas où il fait des emprunts aux passages de l' *Histoire de notre tems* de Guilllaume Paradin.